【土木史研究　第20号　2000年5月　自由投稿論文】

鎌倉地方の史的庭園における築造技術に関する研究

―建長寺方丈庭園の変遷について―

" Study of Construction Method in Old Garden in Kamakura "

―The Modification Processes of Kencho-ji Garden―

石　原　　彩　子

ISHIHARA / Ayako

Abstract

In this report , I had picked up the *hojo* garden of the *Kencho-ji* temple in *Kamakura* city, and had mentioned about the historic background of the time that the garden was constructed and the several modifications made during past years. As a first step, I chose to re-organize the existing references of the *Edo* era that have been preserved in the *Kencho-ji* temple. Then, I considered of the ways of modifications that anyone had not provided appropriate thoughts as yet.

As a result, the following points were made clear. One is that the major modification was made such as the size-reduction of the pond at the same time of the reconstruction of the adjacent temple building in the *Horeki*-period (1751-56). The other point is that the garden had acquired the complete shape as the *Zen*-garden by the modification conducted by the gardener named '*Sotei*' in the *Meiwa*-period (1769). The former change was conducted by '*Sanzaemon*' that seems to have had considerable knowledge about both architecture and landscape. Here, the term landscape is used to describe not just landscape designing but civil engineering aspects of garden construction.

1.　はじめに

本論は鎌倉市に所在する建長寺方丈庭園を取り上げ、禅宗寺院が擁する庭園の造られた背景についての考察を行う。建長寺をはじめとしてこの地域には鎌倉期五山文化として栄えた禅宗寺院が多数存在する。これらは創建時より中興・災害を受け、それと共に庭園も改造されてきた歴史をもつ。わが国における方丈建築の特色は多くの場合、室内からの庭園鑑賞をともなうことにあり、方丈の建設に際しては必然的に室内側から庭へ向けられる意識が存在したと考えられる。

建長寺方丈庭園の沿革についてはこれまでにもいくつかの文献で指摘されてきたが[注1)]、改造・改修を含めての庭園形成期について総合的に把握した例はなく、具体的な改造手法についても未解明のままであった。そこで方丈庭園の改造過程を建長寺に関する文書により明らかにすると共に、その思想の起源についての推定を試みるものである。

2.　建長寺方丈庭園の成立と変遷

2.1　建長寺建立と庭園の成立

建長寺は巨福山建長興国禅寺といい、鎌倉五山の第一位とされる臨済宗建長寺派の大本山である。建長 5 年（1253）に鎌倉幕府五代執権北条時頼が建立したわが国最初の禅寺である。創建当時の伽藍配置は、中国宋時代の禅林風を模したもので、総門・山門・仏殿・法堂などの主要な建物が一直線上に並び壮観をなしていた。その後、14、15 世紀の数度の火災により、その多くを焼失した。江戸時代に入り伽藍の再建・復興がなされ、現在に見られるような構成となった。

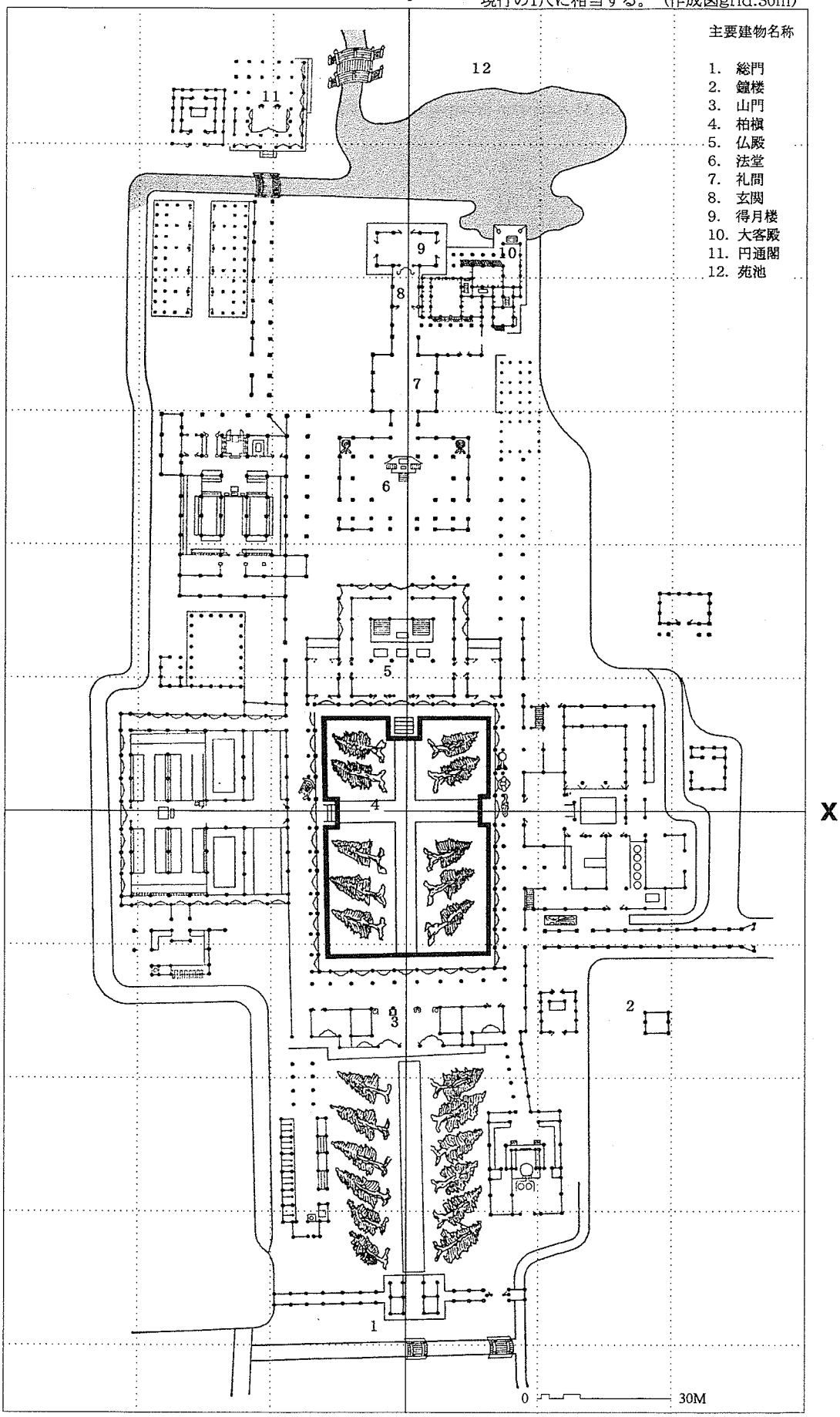
現在の建長寺方丈の裏にある庭園は蘇碧池（心字池）を中心に作庭されている。現在の池の前身と思われる池の様子は、既に創建当時の伽藍古図である「元弘の指図」（図-1、第 3.1 項にて詳述）にも描かれている。作庭者は開山大覚禅師か、その法灯を嗣いだ人物と伝えられるが、蘇碧池が大覚禅師とどのようなつながりがあるのか、

keywords: 鎌倉 / 古文書 / 庭園形成期 / 江戸時代
Kamakura/Ancient manuscript/ The construction period of the garden / Edo era

早稲田大学建築史研究室博士課程　工修
（〒169-0072 新宿区大久保 3-4-1）Laboratory of Architectual History,Waseda University,Ph/D course

図-1　建長寺「元弘の指図」（1331）

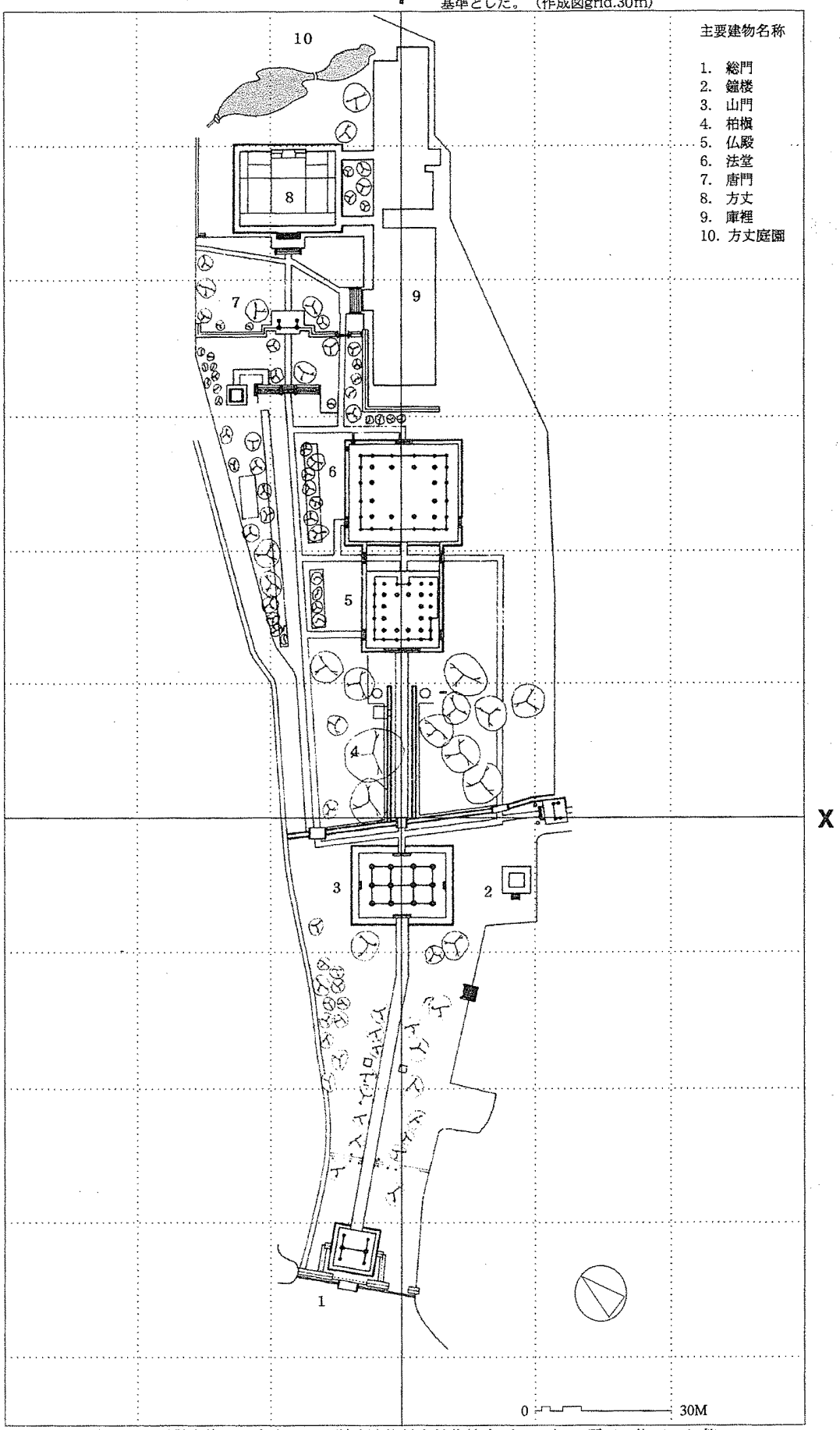
祖本・元弘元年（1331）
各堂宇の柱間規模の記載があり、原図の縮尺は平均的には182分の1であって、200分の1に描いたとすれば、1.1尺が現行の1尺に相当する。（作成図grid.30m）



『神奈川縣文化財圖鑑―建造物篇―』神奈川県教育委員会（1971）の原図に修正・加筆
（伽藍後方の苑池に色付しgrid作成）

図-2　建長寺「境内図」（1996）

「元弘の指図」との規模比較を行うため、統一縮尺の図面を作成した。原点の設定方法は、まず主要堂宇の中心軸をY軸にとり、X軸の設定は、仏殿の前栽として創建当時からあったとされる柏槇を位置判断の基準とした。（作成図grid.30m）



『建長寺山門保存修理報告書』文化財建造物保存技術協会（1996）の原図に修正・加筆
（伽藍後方の苑池に色付しgrid作成）

また当時の建長寺の盛衰とどう関わりを持って作庭されたのかについては明らかにされていない。

現在の庭園（図-2）は、江戸期に改修され、後世[注1)]においても手を加えられたものである。約 600 坪の池泉鑑賞式庭園であり、池泉の背後にある築山の中央に見られる枯淡な石組の意匠に鎌倉時代の手法が僅かに残る。

2.2 建長寺方丈庭園の変遷

（1）建長寺の方丈再建

しばらくの衰退状態を一掃するかのように江戸後期の鎌倉大社寺では造営が頻繁に行われ[注2)]、建長寺も伽藍の再建、整備が大いに進んだ時期であった。方丈再建の過程を概ね年代順に記すと、現敷地にはまず寛永 18 年（1641）に旧方丈が再建される。そして宝暦 6 年（1756）に方丈（龍王殿）と書院が再建された際に、旧方丈は隣接する庫裡に移築された。しかし、方丈（龍王殿）は大正 12 年（1923）9 月に関東大震災により倒壊し現存しない。現在の方丈は昭和 18 年（1943）に京都の般舟三昧院から移築されたものである。

数度の回禄や兵火により、当寺について詳細に語る史料は消滅もしくは散佚しており、最も栄えた鎌倉末期から室町期にかけての史料は数少ないと言える。その中で、比較的まとまっているのが近世の記録である。元禄を上限とする『参暇日記』をはじめ、床暦・宝物帳・末寺帳・建造物関係の史料などが、その主なものである。

本論においては建造物関係史料のうち、庭園に関係する以下に示す 3 点の記録を分析対象として取り上げることとする[注3)]。

①『龍王殿再建日記』（表-1）
②『常住日記』（表-2）
③『参暇日記』（表-2）

（2）宝暦年間の庭園の改造の内容

方丈（龍王殿）は宝暦元年（1751）に没した徳川吉宗葬礼施入残金 40 両を基に再建されており、この江戸後期の造営の経過は、『龍王殿再建日記』に詳しい。造営費は基金の利殖と相・武・房・野・甲・豆等諸国の末寺勧進により、工事は建長寺直営で行われ[注4)]、再建の儀式がとり行われてから建物の完成まで約 5 年を要している。他にも、材木は相当な量を江戸材木屋で求め舟で「坂ノ下」という地名につけ搬入されたことが記されているが、江戸に近いため実際に江戸大工と鎌倉大工の競合があったことが知られている。

工事の概略過程（表-1）を見ると、釿始から始まる建造物施工の以前に、土木工事と思われる工程が約 2 年にわたって行われている。これは旧方丈の庫裡移築にともなう建築基礎の築造であるとともに、この間の方丈庭園の改造点をも窺わせる有効な資料であると考えられる。それによれば、宝暦 4 年（1754）2 月 18 日に「蘸碧池を六尺通り埋立て」に同意を求める旨が記されており、蘸碧池の面積がかなり縮小されたと推定される。

また、実際の工事の過程で、いつごろ庭園施工および設計計画が組み込まれたのかを知る手がかりに、宝暦 4 年（1754）5 月 26 日「大工三左衛門方丈地図書始」の記述がある。おそらく庭園改造設計および建築設計を図面中に示したものであったと思われ、「大工三左衛門」なる人物は建築・造園の両方の知識を有していたとも考えられる。

構造物の築造および改修には、第一に線を引く専門的知識をもつ「技術者」と、第二にこれに基づいて具体的な工事を行う「施工者」が必要であるが、この宝暦の庭園改造にみる限り、前者には「大工三左衛門」が相当し、作庭専門家の関与は確認されない。

庭園施工の一般的な順序に関しては、谷村鐵三郎による『造園土木』[文献6)]にその概念が示されている。それによれば、庭園の施工は、土木工・植栽・建築・仕上の 4 つに分けられ、概ねこの工程で施工が行われる。

『龍王殿再建日記』に、この分類をあてはめると、（表-1）の工程の欄のようになり、『造園土木』に示されている様な、まず樹木や石材の搬入をし、大木の植栽が完成し、排水系統等の土木工が仕上がり、埋戻しされた土壌や、盛土が充分沈定するのを待って、最初に掻き取って堆上げておいた表土を土工の全表面に敷き広げ、土工の最後の仕上げをなすといった造園の様子を断片的に窺い知ることができる。

この工事施工にあたって職人ならびに人足車力等まで延べ 8 千人程[注5)]が関与した。これだけの人数が有効に働くために、大棟梁や諸職棟梁を頂点とした大組織がこの工事施工に際して組まれている[注6)]。

表-1　建長寺龍王殿再建工事略日誌（「龍王殿再建日記」をもとに作成）　（作成：石原）

年号	年	月	日	工事と儀式	釈文	工程
寛延	四辛未年	6	20	徳川吉宗死去	有徳院様御他界被遊候ニ付如崎如先例納経拝礼相済	献納金の手配（約2年3ヵ月） 造営方針の指図（約1ヵ月） 土木施工（約2年） 土木工 植栽 建築的施工 方丈建築施工（約6ヵ月） 仕上げ 再建の義から完成まで（約5年）
	1751				御施物三百貫文被下置雑用指引残金四拾両有之満山	
				再建之義相極	衆評之上右四拾両を以致台金方丈再建之義相極	
宝暦	三癸酉年	8	1	末寺勧進	方丈再建ニ付末山江化主発足	
	1753					
		9	30		帳面金高都合六百九両余	
	四甲戌年	2	8		宝珠庵下之畑どて土取始方丈地形之初候故四方鎮守	
	1754	2	18		方丈之裏陜ニ付和尚方へ御内意を蘇碧池六尺通埋事	
		2	24		宝珠庵下土手土取相済	
		2	26		新堀筋縄張和尚方御見分相済	
		2	28		諸役者方丈ニ会新堀渡之相談広サ五尺長サ九拾弐間	
					深サ水流候様ニ致	
		2	29	一山衆議		
		2	30	役人任命	役人与次右衛門へ為酒代金弐百疋右之通ニ相極手付	
					金五両相渡	
		3	28		新堀石垣築始崩石を以両側十間余	
		4	5		室中板之槻木挽弐人ニ而挽始	
		4	19		本石ニ而宝珠庵下より築始	
		5	19		新堀土取掛	
		5	21		石屋築キ掛	
		5	26	方丈地図書始	大工三左衛門方丈地図書始	
		6	5		新堀之土方丈庭并唐門外江運	
		6	6		此日より築山ノ大椴共伐始	
		6	26		蘇碧池より之水送成	
					正統庵籔之内新堀開宝珠下堀筋土運了	
				普請小屋を作る	小屋地取定	
		6	28		小屋板立	
		6	29		小屋上棟	
		7	11		小屋葺下地	
		8	5		方丈腰土手築	
		8	14		土手築了	
		8	28		大雨池ノ西方土手石垣共ニ三間余崩	
		9	2		寺中人足両人例ノ崩石ヲ出七日大雨又石垣六間程崩	
		9	24		石匠ヲ入人足ヲ入堀土手崩築了	
		10		普請方休		
		11			新堀石垣之萱人足にて茅を以編之	
		12	13	材木調達	柱木相調ニ付出府	
	五	1		正月休		
	1755	2	20		方丈裏紅葉之木植替	
		9		調達材来る		
	六					
	1756	1	11	釿始之式	方丈於広庭大工棟梁三左衛門釿始之式取行	
		1	12		大工木挽共ニ細工始ル	
		3	1		江戸より車力来ル	
		3	2		地形築初ル	
		3	3		礎穴築始	
		4	29		方丈地組始ム	
		6	13	立柱祈祷		
		6	29	架梁之祝儀		
		7	22	棟上之式行		
		7	30	結算	此日ヲ以龍王殿之一勘ヲ見ンコトヲ要悉納下ヲ計ル	
					納ハ僅ニ三百六十両余之金、下ハ登八百六十余之金	

表-2　建長寺龍王殿方丈庭園工事記録（「建長寺常住日記」「建長寺参暇日記」をもとに作成）　（作成：石原）

年号	年	月	日	出典	釈文
明和	六	3	7	参暇日記	方丈築山の修築を始め
	1769	4	10	参暇日記	同年4月10日になり庭開、仮山師宗庭
		4	10	常住日記	此日方丈築山茂出来上り候故、右庭開を相兼中食赤飯等為致、山中不残芝居へ参ル、金弐百足為祝儀雪下若者共へ遣候、即夜於方丈和尚方并諸役役者打寄築山沙汰（不明）振舞候
		4	11	常住日記	同十一日宗庭方へ為礼銀子弐枚

(3) 明和年間の庭園の改修の内容

次に、これよりしばらく後の明和 6 年 (1769) に龍王殿方丈庭園の改修工事が行われたが、その様子は『参暇日記』および『常住日記』に具体的な記述がある (表-2)。『参暇日記』によれば、明和6年 (1769) 3月7日「方丈築山の修築を始め」とあり、翌月 10 日に築山が出来上がった様子が『常住日記』に記録されている。また同日に庭開きの祝儀が催された様子と、次の日に庭師「宗庭」に対して銀子弐枚という高額な謝礼が支払われたことが記されている。

庭師「宗庭」の名は初出であり、その略歴や詳しい造園活動についてはいまだ明らかとされていないが、今後の研究において、相模・武蔵・房総といった室町末期以降の鎌倉の影響圏とみられる地域における禅宗庭園文化を考察する上で、 重要な位置を占める人物であると思われる。

以上を通して、江戸中期から後期にかけての改造過程をまとめると、まず宝暦年間の改造に関しては、建長寺の伽藍復興により、方丈の再建にともなう大規模な土地造成という建築物優先の思想で行われたため、その影響で庭園の範囲は縮小され、庭園の美観と建物との調和を失ってしまったことが想像される。これを克服するかのように、その後の明和の改修においては、専門の庭師が指揮にあたっており、この時代になって禅宗寺院の庭園にふさわしい風致が整えられたものと考えられる。

(4) 江戸時代の石材流通

前項でも紹介したように『龍王殿再建日記』によれば、必要な材木の相当量を江戸で買い求めていたとされるが、材木と並んで多量に必要とされた石材[注7]については具体的な記述はない。近世社会における石問屋仲間の活動を記録した『石問屋文書』[注8]によれば、宝暦一明和期において石問屋の関わった出入を記したものとして以下のような記載がある。

『石問屋仲間諸用留』宝暦二申年二月

原文「一、組合之内伊豆屋与兵衛殿義 (略) 寛延四末年六月廿日、有徳院様御他界被為遊候二付、諸侯様御献備石燈籠御用被仰付候処」

このように、寛延四年 (1751) 六月、徳川吉宗の死去にさいし、諸大名の献備する石燈籠を石問屋の一人である伊豆屋与兵衛が請負ったことが書かれているが、この人物が龍王殿再建にあるいは参画していたのかについて論証する資料は発見されていない。

3. 建長寺庭園の設計思想

3.1 創建時における庭園の設計思想

(1) 「元弘の指図」にみる中国的要素

建長寺に所蔵される「元弘の指図」は、元弘元年 (1331) の祖本の精密な写しである。これは京都の東福寺大工越後が文保 3 年 (1319) に炎上した東福寺の再興のために作成した建長寺の詳細な全体平面図である。

わが国の禅宗寺院伽藍の規範は、南宋五山にあるとされるが[注9]、「元弘の指図」をみると、鎌倉末期の建長寺伽藍は谷をふさぐ盛観であり、13 世紀前期の「大宋諸山図」に描かれた杭州霊隠寺や寧波天童寺の伽藍の様式とよく一致する。

指図にみられる、中心軸線上に主要堂宇を配し、伽藍中心部の四合院配置[注10]、東西朶殿をもつ正面殿宇の構成は中国的であるとされる。

巨大な建築群で構成される中心部に対し、伽藍後方は池をめぐって低平な方丈と楼閣形式の瀟洒な堂が池を囲んで呼応するような空間を構成している[注11]。しかし、このような水をテーマにした建築構成は南宋五山にはなく、伽藍上に苑池を組み込む手法は日本独自とされ、その発祥は建長寺にあると推定されている[文献8]。そしてこの伽藍後方の意匠は、蘇州など中国江南の園林[注12]を規範としたものであると指摘されている[文献8]。

(2) 中国園林の導入

中国園林の具体的な導入過程を知る確実な史料はまだ発見されていないが、建長・円覚両寺創建時の工匠南宋派遣を伝える書が残されている[注13]。同様に作庭に関しても専門家の派遣および庭造りを心得た人物の渡来が想像される。おそらく築造技術をはじめとした「庭園の生産体系」の移入もあったことが考えられる。次に、中国における古い文献の中から、「生産体系」の様子を語る部分を取り上げる。

・『呉風録』[注14)]

原文「朱勔子孫居虎丘之麓、以種藝選石為業、遊於王候之門、俗称稱花園師」

（訳）朱勔の子孫は虎丘の麓に住み、造園をなりわいとして王候の家に出入りし俗に「花園師」と呼ばれていた。

・『癸辛雑識』[注15)]

原文「工人特出呉興、謂之山匠、或亦朱勔之遺風」

（訳）庭師にはとりわけ呉興出身者が多く、これを「山匠」と呼ぶ。朱勔以来のならわしならんか。

上記には「花園師」「山匠」の呼称がみられるが、この「花園師」は、日本の江戸中期以降の書物の中に植木屋の意味として現われている[文献9)]。この他にも植木屋の呼称として、タク陀師・木商・樹斎・樹芸・花戸・芸戸・樹芸家・盆栽師・地木師・鉢物師・替物師などと書いて、植木屋を意味していた。とりわけ「花園師」の意味は、広い苑地や植溜めをもち、珍花果樹を栽培して顧客の縦覧にまかせ、求めに応じて仕立品を客に売ったり、邸宅に持ち込んだりと、植栽はもちろん作庭一切を請負う大勢の徒弟をかかえた大規模な業者である。そして陳従周著『蘇州園林』[文献10)]にも、宋代以降の有名な造園家は皆、江浙の出であり、すぐれた造園家はまた巧みな施工者であったとの記述があるが、このような事実が日本における禅宗寺院の成立にどのような影響をもち、または導入されたのかについての考察は今後の課題としたい。

3.2 江戸時代における方丈庭園の設計思想

わが国における近世の方丈建築の発達には、宗派や地域性による差異が認められ、庭園もそれとともに独自な発達をしたものと考えられる。建長寺の属する臨済宗の方丈建築の特色には、住持が公務をはなれた際の居場所として用い、禅宗寺院内の私的部分として設けられた経緯がある。従って方丈建築に付属する庭園は、たとえば浄土式庭園のような広大な苑池を必要としない特質も一つには考えられる。また、江戸時代は各地に多くの方丈建築が建設された時期である。

建長寺方丈庭園の改造には、近世期のこうした背景があり、方丈建築の用途に合わせて比較的小規模な庭園が計画され、苑池の形状も創建時と比べ縮小され、ほぼ造り直された経緯が示されている。

4. まとめ

本論文では、建長寺方丈庭園の江戸時代後期における改造過程を当時の工事記録に基づいて明らかにするとともに、創建時における苑池の様子を把握した。

この結果、宝暦年間の方丈再建にともない、苑池が埋められ縮小されるといった大改造が行われたこと、また明和年間においては、庭師「宗庭」による改修がなされ完成の祝儀が行われた事実から推察して、おそらくこの時点で禅宗庭園としての風致が再整備されたものと考えられる。

宝暦年間の大規模な改造の指揮には、「大工三左衛門」があたり、この人物は建築・造園の両方の知識を有していたことが考えられる。ここでの造園は、土地の造成をはじめとしたいわゆる土木工事を含む広い意味での工事全般を示している。

最後に、創建時の建長寺庭園は中国江南の園林の設計思想を規範としている点に触れたが、今後は中日両国の築造技術の比較を行うことで技術導入過程の考察を行いたい。

謝辞

本研究に際して、鎌倉国宝館の三渕美恵子先生、華厳学研究所の小島岱山所長、名城大学の伊藤三千雄教授および鉄道総合技術研究所の小野田滋先生より多くのことを御教示頂きました。謹んで感謝の意を表します。

本文注

1　たとえば建長寺庭園の作庭沿革と現況に関しては重森完途氏によって以下のように報告されている。

『建長寺庭園は、開山大覚禅師か、その法灯を嗣いだ人によって作庭されたという事は事実であるが、現在の庭園にはその匂いぐらいしか残されていない。寛永年間（1624-44）に再建された節、本庭も原形を残さない程に大改修されたためであって、一般には「江戸初期の作庭」と言われている。現存の裏庭は、約600坪の池泉鑑賞式の作庭で、池泉の背後の築山のほぼ中央に、枯淡な石組が意匠されていて、この石組に少し鎌倉時代の手法が匂っている。建長寺庭園は、極く僅かに、鎌倉時代の匂いだけが残っているが、他は総て寛永や江戸中期、明治頃の手が入っていると言うべきである。』

（文献 1，p.642）。

2　幕府直轄の鶴岡八幡宮を別にすると、江戸後期に最も大きな造営をしたのは建長寺で、本山として末寺が 561 寺（寛永 10 年、1633）もあり、これが勧進造営の基盤であった（文献 5，p.156）。

3　鎌倉寺社に所蔵される近世古文書は三浦勝男氏によって解読が進められており、その内容が遂時「鎌倉志料」として刊行されている。本論で取り扱う『常住日記』は元禄 14 年（1701）から天明 4 年（1784）にわたるもので、その中から明和期における庭園築造の記述を取り上げた（文献 2，p.119）。
また『龍王殿再建日記』も同氏により「鎌倉建長寺近世史料（二）」（三浦古文化一第 9 号一所収）に継続発表されている（文献 3，p.106）。『参暇日記』は『巨福山建長寺境内遺跡』（文献 4，p.19）に報告された内容を参考にした。

4　建長寺は江戸後期の再建に一貫して建長寺大工を棟梁として、鎌倉大工が造営に当たっている。対して、鶴岡八幡宮上宮（文政 11 年、1828）は幕府作事方の造営、円覚寺山門（天明 3 年、1783）は江戸大工の手間請負などがみられる。建長寺文書をみると、龍王殿再建（宝暦 6 年、1756）には棟梁河内三左衛門・脇棟梁大村久兵衛・棟梁子の久右衛門・坂ノ下大工等があたり、茅葺は筑波屋根師が行ったと記録されている。

5　『龍王殿再建日記』中「僧俗合シテ八千人程」の記述あり。

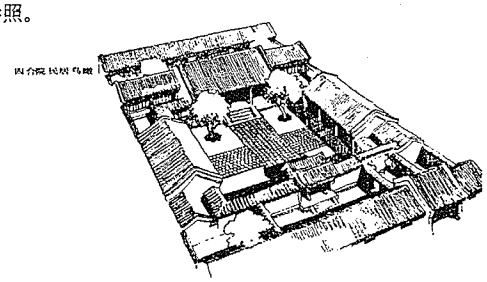
6　『龍王殿再建日記』中、宝暦六年三月十三日「方丈ヲ曳始メ門前惣役其外山之内上下より人足十人宛寄進（略）都合六十人、門前役四十六人、車力十六人并大工木挽諸職人迄不残昼食ヲ振舞僧俗都合百八十人程なり」の記述あり。

7　石材が近世社会において建築資材として重要な意味をもっていたことは、城郭建築をはじめとする建築記録によっても明らかである。江戸の場合には参勤交代制度によって諸大名の邸宅が造成されたから江戸城の建設とともに石の需要は比較的大きかったと考えられる。これに加えて、埋立地による城下町の拡張にも必要なものであった。

8　東京都公文書館所蔵の石問屋文書（写本）に収録されている 7 点の史料を基に、近世社会における石材の流通営業活動を検討したものに吉原健一郎による“江戸の石問屋仲間”（三浦古文化所収）がある。
「石問屋仲間諸用留」享保 10 年（1725）から終わりは明治 2 年（1869）迄の記録を掲載し、石問屋仲間の成立経過・営業状況・論争などの内容を含む（文献 7，p.44）。
享保 10 年（1725）の問屋仲間組合結成にさいし、石問屋として登録された件数は 16 件にのぼり、それらの所在地は霊岸島に限定されている。ところが当初 16 件のうち 4 件のみが継続して営業しているがその他は休業していることが石問屋の営業が安定的でないことをうかがわせる。これに加えて明和以降になると新規の問屋が出現し、これらは深川・本八丁堀・鉄炮洲などで営むようになる（文献 7，p.48）。

9　禅宗様式の祖形は南宋末より元にかけての 13 世紀における浙江省と江蘇省南部の中国建築に近い。この地域はちょうど南宋の都臨安（杭州）を中心に分布した中国五山の所在地と一致し、禅僧の交流をあわせ考えると、禅宗様式の直接の祖形は浙江省を中心に分布した13世紀の五山建築に求められる。

10　右図参照。



11　「池辺の方丈、得月楼、観音殿よりなる伽藍後方の建築は方丈をのぞき二棟とも二階楼閣形式であって、これに貞治ころ青山慈永が再興した方丈右上の逢春閣が加わり、この一廓は中国の園林を日本的に換骨脱胎した瀟洒な景観であった」（文献 8，p.196）。

12　「中国では日本で庭園と呼ぶところのものを園林という」「園林の言葉の意味するところは、日本の庭のそれよりもはるかに広く、山や谷をふくむ皇帝の苑囿から小さな院子にいたるまでが含まれる」（文献 10，p.6）

13　「伝説に円覚寺大工高階家の祖先は無学祖元来日に随伴した工匠といわれる」出典『円覚寺史』

14　明の黄省曽の撰になる

15　周密、雑事を収録して五巻より成る

参考文献

1　高木宗監『建長寺史一末寺編一』大本山建長寺（1989）

2　三浦勝男『鎌倉志料一第 6 巻一』鎌倉国宝館（1994）

3　三浦勝男“鎌倉建長寺近世史料（二）”三浦古文化，No.9（1971）

4　『巨福山建長寺境内遺跡』（1991）

5　関口欣也『鎌倉の古建築』有隣堂（1997）

6　谷村鐵三郎『造園土木』雄山閣（1928）p.222

7　吉原健一郎“江戸の石問屋仲間”三浦古文化，No.31（1982）

8　『神奈川縣文化財圖鑑一建造物篇一』神奈川県教育委員会（1971）

9　針ヶ谷鐘吉『文明開化と造園』東京農業大学出版会（1990）

10　陳從周『蘇州園林』collection dirigee par ART VIVANT decouverte de l'espace［3］（1956）